

## 中等科・高等科

### カリキュラム移行について

#### 前 学校改革推進室 山本 太郎

2018年度に発足した学校改革推進室主導のもと、自由学園全体の学校改革が進められてきた。中高においては「共学化」「カリキュラム改訂」「校舎改修」の3つが主たる施策である。しばしば誤解あるいは混同されるが、「共学化」するがために「カリキュラム改訂」および「校舎改修」を行なった訳ではない。

キリスト教精神を根底に据えて、「常に『一人ひとり』を大切にし続ける学園」、「子どもたちも教職員も『自ら学び続ける人』になる学園」、「よりよい『社会をつくる人』が育ち続ける学園」をめざす、という学園全体の改革指針の実現のために、それぞれが緊密につながりながらも並列に存在している具体的な方策である。本論ではカリキュラム改訂に絞って、その目的と経緯、骨子、移行プロセス、運用状況について述べる。

#### カリキュラムとはなにか

そもそも本論の主題として用いられている「カリキュラム」とは何か。前副学園長の成田喜一郎は『幼児・児童生徒・学生・大学院生・現職教員などの学びの履歴 learning histories と、学習者の一人としての授業者の実践研究史 history of the practical study の総体である。』（2018.2 成田）つまり学びを構成する包括的な概念と定義する。「教育課程」つまりいつだれが何コマ教えるか、という計画、プログラムだけではないということがここから読み解ける。本校における「カリキュラム改革」は、成田の忍耐強い助言や示唆により、教育活動全体を捉えなおし再構築しながら行なわれたが、成果物としては「教育課程」に落とし込むこととなった。本来並行あるいは先行して論じられるべき「評価」や「学びのプロセス」についての議論は途上だと言わざるを得ない。しかしこれらの議論から「マインドセット」の検討が行われ、中高の教職員内で共有されるに至った。これは、教職員を生徒の評価者、教授者ではなく協同学習者であると位置づけ、学習者同士が互いの学びの権利を尊重し、支援し合うことで学びの場を構築していこうとする共通の認識である。こちらについては本論では詳しく触れないが、「マインドセット」と「教育課程」は表裏一体である。両者が深いリフレクションによって熟成され「真正な評価」を中心にした「カリキュラム」が今後立ち上っていくことを期待する。

#### カリキュラム改訂の経緯

以下の5つを実現するために改訂は行なわれた。

- ①学校改革指針に基づき、今後の中高の教育活動の中心に「探求的な学び」「社会課題を発見・解決する学び」「キリスト教価値観に触れる学び」を織り込む必要があった
- ②学校改革指針に基づき、画一的な科目履修や授業展開ではなく、生徒一人ひとりに学びの機会が保障される仕組みを構築する必要があった
- ③文科省の「学習指導要領」改訂により、本校の教育課程も新指導要領に準拠するものに変更する必要が生じた
- ④中高生の「多忙感」を改善し、学びに向かうリズムで余裕のある教育課程と時間割を構築する必要があった
- ⑤女子部・男子部それぞれに発展・改善してきた教育課程と時間割を、平準化する必要があった

#### カリキュラム改訂の骨子

上記5項目に対応した改訂の骨子は以下のとおりである。

- ①「探求」「共生学」「TLP」の新設
- ②高等科における「学年制の撤廃（単位制への移行）」「卒業必要単位数の削減」「必修科目の削減」「選択科目の導入」
- ③新指導要領と対応した教育課程の策定
- ④週当たり時間数の削減
- ⑤男女共通の教育課程の導入および一部教科の男女合同授業実施

#### カリキュラム改訂の検討プロセス

教育課程の原案は学校改革推進室からの諮問を受けた

ワーキンググループにて作成し、推進室に答申した。ワーキンググループは2018年度から2020年度まで単年スパンで都度組織され、小中高の若手・中堅教職員から構成されており、多忙な日常業務の隙間を縫って、議論を重ねた。長らく自由学園では全員が同じことを同じように学ぶことが前提として教育課程が組まれてきたため、ワーキンググループや推進室内でも議論は紛糾した。さまざまなシミュレーションが行なわれるたびに、自由学園はどのような生徒を育みたいのか、という議論に立ち返ることとなったが、前述の改革指針を共通認識として持てたことで、徐々に方向性を固めることができた。

改訂のタイミングは学習指導要領の改訂と合わせて行なうため、合意形成から承認に至る流れも中高別となった。提出した原案は教科主任会で共有し、主任会内や各教科部会で協議していただいた。長年、それぞれの教科が大切にしてきた教育プログラムが、コマ数や選択科目化することで実施できなくなるケースも多くあり、ここでも多くの議論が交わされた。各教科部会からの要望を集約して、繰り返し調整が行われた。多くの時間を割くことになる「探求」「共生学」「TLP」についても、これまで実施したことのない分野であるがゆえに不安や懸念は多く挙げられた。また旧来の教科でも探求的な、あるいは社会課題に触れる学びは多く展開されてきていたために、探求活動を教科から抜き出す意味についても多角的な検証がされた。他方、中等教育機関が抱えがちな教科ごとの分断を乗り越えるために、探求や共生学を発展的な授業研究の場として好意的に受け入れる意見も見られた。探求や共生学は導入年次前にトライアルを行ない、試行錯誤を重ねた。

中等科は2020年9月に、高等科は2021年9月に、それぞれ各教科部会からの要望を織り込んだ修正案が承認されたあとは、東京都への教育課程変更の手続きや生徒・保護者への説明を行なった。自由度が増す新課程は概ね好意的に受け入れられたが、戸惑いの声も多くあがり、全体あるいは個別にも説明機会を設けて理解促進を諮った。

### 現在の実施状況

中等科は2021年より3学年一斉に教育課程を改訂した。また高等科は2022年入学生より年次改訂を行なった。2023年現在は、高校2年生までが新課程、高校3年生が旧課程という移行期間にある。2024年度からは全学年が新課程になり、移行完了となる。



〈上 QR コード: 現中等科・高等科教育課程掲載資料※7 ページ参照〉

高等科は単位制移行に伴い、選択科目の履修登録が運用における重要なポイントとなる。

中3の段階で高等科での学び方をよく理解して進学してもらう(内部進学生・外部入学生ともに)必要があるため、説明機会を設けている。

また高等科入学後は早いタイミングでガイダンスを行ない、夏休みには高2からの履修登録を仮に検討する課題を渡しており、夏明けにはその課題をもとに全員面談を行なっている。

同時に教員サイドは、冬までに次年度雇用と授業担当者割り当て、時間割作成を完了している。

作成した時間割をもとに、高1・高2は冬休みを使って、より具体的な履修登録のプランを組み、提出する。

3学期にはそれらをもとに再度面談を行ない、2月末には履修の本登録を行なっている。教科書発注、授業クラス数の決定、授業実施教室の割り当てなど、履修登録後は教員サイドの作業が多忙を極める時期となっている。

別稿で触れる「学びの共有会」や「飛び級社会人」制度もまた新課程導入と時を同じくして始まった。2017年度より導入された留学支援制度も利用希望者が増加している。評価の多様化、学びの「場」の希釈化は新課程導入と相まって今後も一層の充実が期待できる。

### 今後の見通し

23年度は選択科目の履修が始まり、男女生徒が入り混じってさまざまな教室で授業を受ける姿や、空きコマに思い思いの場所で時間を過ごす生徒の姿が、日常的に見られるようになってきた。23年度は男女別学でありながらそれぞれの校舎を行き来するため、物理的・心理的なストレスも多少ならずあるが、24年度からは共学化により、選択科目の開講も高等科キャンパス内で完結することが可能になるため、上記の問題は緩和されることが期待できる。

なお高3の選択科目では、学部の授業への乗り入れや、学部の先生方による授業開講も検討されている。これはま

だ現時点では確定していないが、イベント的ではないアカデミックな高大接続の在り方として大いに期待している。

またすでに25年度以降のカリキュラム改訂の検討が始まっている。カリキュラムは一度決めたら終わりではなく、絶えず振り返り、見直しながら改善されていくものである。移行にかかるエネルギーは膨大ではあるが、それらに臆することなく、日々新たに成長していくカリキュラムでありたい。

## 謝辞

前副学園長で学校改革推進室の立ち上げメンバーでもあった成田喜一郎先生はカリキュラム改革の一番苦しいところを担い続けてくださり、目先のことに陥りやすい会議体に絶えず俯瞰的な視点から一石を投げ続けてくださった。熊本大学の苦野一徳准教授には学校づくり全体を俯瞰していただきつつ探求的な学びにおいても様々な示唆を頂戴した。

新渡戸文化学園の高橋純司先生、高橋正明先生、筑波大学附属坂戸高等学校の藤原亮治先生には選択科目導入や単位制移行に際して具体的なアドバイスを多くいただいた。

またそのほかにも実装や告知に際して学内外の多くの方にお力添えをいただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。

なお、行きがかり上、私が推進室・ワーキンググループを代表して本稿を執筆させていただいたが、3年間に渡り、さまざまな形で推進室・ワーキンググループに関わった教職員、中高の教育活動に関わった全ての教職員・保護者・生徒によって今回のカリキュラムが実装され、今日に至っていることを、結びに代えて述べさせていただきます。